

「幼小いっしょに！のとまり会」

1 趣 旨

- ・年長児と小学1・2年生が親元を離れ、自分の力で生活する場を提供する。これにより、一人ひとりが自分のできることを積み上げて体験の幅を広げるとともに、子どもの自己肯定感を高める。また、年長児と小学1・2年生が共に活動することにより、異学年のかかわりが生まれるプログラムを精査し「小1プロブレム」に寄与する。
- ・保護者にとっては、子育てについて学んだり、保護者同士が情報交換を行ったりすることにより、子育てについて自信をもつ機会とする。また、保護者同士のつながりを構築する場とする。



2 ねらい

- ・異年齢集団による生活体験活動をとおして、低年齢期の子どもたちが体験活動の楽しさを感じるとともに、集団行動や人とのかかわり方のルール等に気付く。
- ・保護者が活動をとおして学び、自らの子育てについて振り返る。また、保護者同士がかかわりを持ち、子育てに対して思いを深める。

3 日 程

- (1) 期 日 第1回 平成26年9月7日(日)日帰り
第2回 平成26年9月13日(土)～14日(日)1泊2日
- (2) 参加者 第1回 53名(子ども27名,保護者他26名)※募集子ども40名とその保護者
第2回 64名(子ども33名,保護者他31名)※募集子ども40名とその保護者
- (3) 研修内容及び講師

(○…子どもプログラム, ◎…親子プログラム, □…親プログラム)

第1回(日帰り)	第2回(テント1泊2日)
<p>【午前】</p> <p>○フードハンターゲーム</p> <p>○昼食(食堂の使い方・マナー)</p> <hr/> <p>□トークセッション</p> <p>講師:沼田直子氏 (南加賀保健福祉センター所長)</p> <p>□昼食</p>	 <p>【午前】</p> <p>○テント撤収</p> <p>○朝のミッション</p> <p>○朝食</p> <p>◎フィールドビンゴ</p> <p>◎おやつ(マシュマロ焼き)</p> <p>◎カートンドッグ</p>
<p>【午後】</p> <p>◎クレープ作り</p> <p>○振り返り</p> 	<p>【午後】</p> <p>○おとまり準備</p> <p>○砂遊び</p> <p>○夕食,入浴</p> <p>○テント泊</p> <p>【午後】</p> <p>○振り返り</p>



〈保護者同士の交流〉



〈フードハンターゲーム〉



〈海岸での砂遊び〉



〈フィールドビンゴ〉

4 成果と課題

(1) 成果

事業評価を目的とし、参加者(子ども)のべ60名、参加者(保護者)のべ57名を対象に調査を実施した。年長児の調査は、ボランティアスタッフの聞き取りによって行った。

①参加者の評価 (アンケートより)

- 事業全体の満足度が全て9割以上(第1回100%, 第2回94%)であった。
- プログラムごとの調査においても満足度は、2つの活動(砂遊び87%, テント泊81%)を除いて9割を超えた。特に、フードハンターゲーム(96%)は満足度が高かった。
- 一番楽しかったこと・頑張ったことの記述から、それぞれの傾向を把握したが、どちらも同じ活動をあげている。ただ、砂遊びについては、年長児は楽しかったものに、小学生は頑張ったものにあげている。これは、1人で活動を楽しむ年長児と、一緒に楽しもうとした小学生の意識の違いからくるものと考えられる。

	一番楽しかったプログラム			一番頑張ったプログラム		
小学生	フードハンターゲーム	フィールドビンゴ	クレープ作り	フードハンターゲーム	砂遊び	クレープ作り
年長児	フードハンターゲーム	クレープ作り	砂遊び	フィールドビンゴ	フードハンターゲーム	テント片付け

②保護者の評価 (アンケートより)

- 1, 2回とも、事業全体の満足度が100%であった。
- 第1回の親プログラム「子育てトークセッション」では、講師の話はもとより、「保護者同士で話ができたとともによかった」との記述が多数あった。
- ボランティアに対する保護者の評価も1, 2回とも9割以上の満足度(第1回100%, 第2回97%)を得た。一方で、2回目の保護者から「ボランティアの元気がなかった」との意見があった。ボランティアの数が少なかったことと、小学生の扱いに慣れていないことが原因として考えられる。次年度は、班付きスタッフを今年度よりも多数配置し、子どもの支援体制の充実を図る必要がある。

○感想より

- ・1回目の親同士でのコミュニケーションをするのはとても珍しく印象に残りました。はじめて会った友達やスタッフと楽しく過ごす子どもの姿が印象に残りました。
- ・親の自分も、知らない人の中で交流するという貴重な体験をさせてもらい、よい経験になったと感じます。レクリエーション、ディスカッション、食堂の使用等、久しぶりに緊張しましたが、楽しく過ごしました。
- ・自然の中で遊ぶこと、発見することなど、普段経験できないことをさせてあげられたことがよかったです。スタッフもたくさんいて、安心できました。

③考察

- 低年齢期の子どもにとって「頑張った」と感じられる活動、小学生には年長児と関わるような活動を設定することができた。これにより、小学生と年長児が力を合わせて取り組んだり、小学生が年長児をリードしたりする姿が見られた。
- 各班を縦割りで編成するだけでなく、小学生と年長児の3~4人のグループを基本に編成した。これにより、グループのお世話をする小学生、小学生の言うことを聞いてがまんする年長児の姿が見られた。
- 保護者同士がかかわれるようにプログラムを配慮した。これにより、保護者同士のつながりを構築することができた。

(2) 課題

- ・食事や入浴等の基本的なマナーについての学びをプログラムに位置づけていく。
- ・今後は、子ども同士のかかわりをメインにしたプログラムを検討していく。
- ・大学と連携しながら、幼児教育系学生のボランティアを確保し、学生の力量アップの場としていく。